



活動タイトル	ダブルケア時代に向き合う家族の「強さ」を支えるプログラム	団体名	NPO法人子育てネットひまわり	
<p>1年間の活動(アウトプット)の目標(事業全体)</p>	<p>◆ダブルケアおしゃべりサロンの実施 家族のライフステージ別に予測される負荷や課題を体験者の話題提供をもとに予防支援的観点から学ぶ場を提案する。また経験者をゲストに招き、必要に応じた講義、ロールモデル体験も取り入れていく。</p> <p>◆ダブルケアアラー応援プログラムツールおよびプログラム検討委員会の立ち上げ 継続運営のための力をつけていく取組として、有識者、専門家をメンバーに迎え、発信ツールの作成を行う。ツールはできる限りシンプルに、ダブルケアを理解と認識が深まる内容をめざす。</p> <p>◆ダブルケアアラー応援プログラムの開催 完成したツールを使用し、講座を開催する。実施は、当事者はもちろん、各分野の専門職の担い手など、ケアの支援に関わる人を対象に実施することで家族の理解者を増やす。修了後はダブルケアアラー応援隊として登録し、今後の活躍をめざす。</p>		<p>■活動風景</p>	
<p>■活動報告</p>		<p>■1年間の目標に対する達成状況</p>		
<p>◆ダブルケアおしゃべりサロン 3月プレ開催。4月より毎月1回第1火曜日拠点で開催。平均5～6組参加×6回。5月よりダブルケア応援手帖を使用している実施。</p> <p>◆ダブルケアアラー応援プログラム検討委員会 検討委員会開催10月1回。ただし、個別に4～5回丁寧な対応をしながら、ツール作成。ツール完成後も情報交換を継続</p> <p>◆ダブルケアアラー応援プログラムツール作成 ・ダブルケアアラー応援手帖 11月より原稿依頼、打ち合わせ編集後4月完成 5000部 ・クリアファイル 5月入稿、6月完成 2000部 ・企業版リーフレット 6月編集外部発注、8月完成 3000部</p> <p>◆ダブルケアアラー応援プログラムの開催 ○6/2西植田地区社会福祉協議会講座：地区社協会員70名 ○6/10高松市社会福祉協議会研修：ケアマネ、保健師、社協職員、保健師、NPO関係者30名 ○6/18支援者研修：子育て支援者、民間、保健師、NPO関係者30名 ○8/19常盤倶楽部(一般社団法人守里会)：職員、当事者3名 ○8/30県立医療大学：看護師、病院地域連携室職員、福祉士、看護学生10名 ○7/6仏生山まちかど茶話会：地区住民、地域コミュニティ関係者50名 ○7/9～10仏生山地域部会：20名、7名 ○7/17太田中央高齢者の会：地域の高齢者、民生委員11名 ○7/17ひまわりはうすところ：利用者親子12名 ○7/18春日支援センター：利用者親子、子育て支援者8名 ○7/23太田中央文化祭実行委員会：地域住民、ミセン職員30名 ○7/24にしおか医院地域子育て支援センター：利用者親子、子育て支援者26名 ○7/26太田南部会：民生委員、地域住民、コミセン職員56名 ○7/26ゆうゆう広場：利用者親子、地域の高齢者、ボランティア中学生10名 ○8/4就労支援施設hitotoco：障害者支援者、ケアマネ、スクールカウンセラー、介護職員、ひきこもり支援者30名 ○11月太田中学校PTA向け開催予定</p>	<p>◆ダブルケアおしゃべりサロンの実施 4月から毎月拠点で定期開催することで、サロンの認知は向上し、来たい時に参加し、知りたい情報を得る仕組みができてきた。目標より参加人数は少なく、ゲストを招いたりロールモデル体験は実施できていないものの、気軽にダブルケアに関する困りごとなどをおしゃべりできることで、いざという時の見通しがついたり負担軽減につながったりして、満足度は高かった。</p> <p>◆ダブルケアアラー応援プログラムツールおよびプログラム検討委員会の立ち上げ 委員会自体は1回しか開催できていないが、個別に4～5回丁寧な対応をしながらツールを編集作成した。そのためツール作成に時間がかかり、完成時期が遅くなったが、シンプルで、ダブルケアについて誰にでも分かりやすくダブルケアの理解と認識が深まる内容となった。しかし、企業向けでの内容ではないので、元のツールをブラッシュアップし、企業版リーフレットを追加で作成した。</p> <p>◆ダブルケアアラー応援プログラムの開催 完成したツールを使用し、当事者はもちろん、各分野の専門職の担い手など、ケアの支援に関わる人、地域の人を対象に研修講座を5回実施開催。より多くの人にダブルケアを知ってもらうためのキャラバンを15回実施。合計約500名に伝え、ダブルケアアラーの理解者を増やすことができた。自分ごととして考えてもらうことで、小さなことからでもダブルケアアラーを支援できる仕組みができた。県内外でもこの取り組みを知ってもらい、新たなつながりもできている。</p>	<p>2019/5/7 「ダブルケアおしゃべりサロン」</p>	 <p>ツール完成後初めて「ダブルケアアラー応援手帖」を使用しながら情報交換をした。</p>	
<p>○「ダブルケアおしゃべりサロン」を毎月定期的で開催することで、サロンの認知も向上し、来たい時に参加し、知りたい情報を得る仕組みができた。いざという時の見通しがついたり負担軽減にもつながった。</p> <p>○「ダブルケアアラー応援プログラム検討委員会」を立ち上げたことで、それぞれの専門を活かした発信ツールを作成することができ、委員同士のつながりはもとより、新たな活動にもつながった。</p> <p>○発信ツールを作成し、それを活用することで、ダブルケアについて理解を広め、ダブルケアアラーの理解者を増やす活動となった。また、企業版リーフレットを作成することで、今後継続的に企業に向けた「ダブルケアアラー応援プログラム」を実施できるような取り組みにもつながった。</p> <p>○「ダブルケアアラー応援プログラム」を開催することで、行政や専門職には、ダブルケアの理解度が高まり、今後、当事者の目線で支援をしていけるような意識づけができた。他の子育て支援者や地域住民にダブルケアの理解者が増え、認識の輪が広がった。そして、ダブルケアアラーの応援者も増え、困った時には地域で助け合える関わりもできてきた。</p>	<p>■事業を通じて得られたノウハウ</p> <p>○やることだけを目的にしない あくまで手段と意識して取り組む意識が育った。例えばツールの作成は当事者ニーズをダブルケアカフェで把握、作成は専門家、行政と連携し内容を検討、原稿をスポット依頼する形で進めた。ツール作成を通して、顔の見える関係づくり、支援の見える化につながることを心掛けた。</p> <p>○少なくとも効果的なやりとりを心掛ける意識を持った。例えば作成の依頼先はメールやチャットを用いた。一方でなにかのついでのやりとりは短くても頻回に行った。完成後の活用方法も共に考え、場合によっては相手のフィールドの実践イメージを持ってもらうなどし、この事業の必要性を共有できるよう心掛けた。</p> <p>○企業目線を持つ意識が育った。課題解決のためには企業へのアプローチが必要と考え、企業視点に長けたアドバイザーとともに、作成。ダブルケアがもたらす企業ダメージの説明データを効果的に活用した。</p> <p>○ツールを効果的に普及するノウハウ作成したツールは応援プログラム(普及事業)とあわせて配布。課題を自分事としてとらえられるよう、ワークや書き出し体験を取り入れることを心掛けた。</p> <p>○プログラムは地域や外部機関で実施したが、日頃のやりとりの蓄積があるため、スムーズに進んだ。多様な方法で実践を発信し「ダブルケア事業を行っている」という理解が広がるよう心掛けた。</p> <p>○言語化については支援者特有の「大変」「しんどさ」など心理的な描写は避け、事実を追求できる言葉を心掛けた。</p>	<p>2019/6/10 「高松市社会福祉協議会研修」</p>	 <p>社協職員、ケアマネ、保健師、NPO関係者対象に講演。当事者をお迎えし、自らのケースについて話していただいた。</p>	
<p>■実施した人材育成策</p>		<p>■活動成果のアピールポイント(自由記入)</p>		
<p>○スタッフはメンターとしてペアを組んで行動し、実践後は必ずブラッシュアップを行った。時には映像を撮影し、話し方、言葉遣いを確認することでツールの説明スキルの向上につながった。</p> <p>○ツール作成など、専門家や行政とのやりとりをすることが多く、連絡調整能力が向上した。(いろいろなツールを使用しているやりとりノウハウが向上)</p> <p>○連絡調整などの機会を通して、スタッフそれぞれにとつて顔の見える関係が広がり、普段の支援にも役立つ力となった。</p> <p>○事務作業を役割分担し、振り返りをしながら作業ができるよう意識づけをした。</p>		<p>この1年間の活動を通じて</p>	<p>ダブルケアの認知度を上げ、ダブルケアアラーの応援者を増やすこと</p>	<p>を達成しました。</p> <p>■受益者の変化(効果測定結果等)</p> <p>ダブルケアについて理解することができた。そのうえで、自分がダブルケアアラーになった時や現在ダブルケアアラーの状態でも孤立せず、スムーズに支援やサービスにつながるための見通しを立てることができるようになった。</p> <p>また、地域の中のダブルケアアラーを応援するために自分ができる支援を具体的に考えることができた。そのことにより、地域の中に応援隊をつくるきっかけづくりとなるとともに、多様な職種の人々が参加することで、お互い顔の見える関係づくりもでき、それぞれが必要に応じて連携し合えるようになった。</p>